

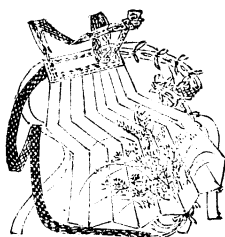
# も

も 藻(名)

唇音にして單子音の一つ。  
水草の名。房の如く毛の如く水中に浮居るもの。

も 裳(名)

〔一〕男子禮服の時袴の上より腰に纏ふ服。形は女子の裳に似たり。〔二〕女子装束の時袴の上より腰に纏ふ服。襷積ひだありて後に長く引く。



〔圖〕

も 褌(名)

〔一〕忌服。〔二〕忌服にて引籠る間。  
つがつが。〇「も」もなく事なく

も 面(名)

おももの略。多くの字の後に來る時にいふ詞。〇「庭」も「田」も

も (後)

〔一〕二つの物を兼ねいふ時に用ふる詞。〇「あれもこれも」「昨日も今日も」「二」打消の詞の前に用ふ。〇「聞きもならはぬ」「道もなし」「三」感詞の前に用ふ。〇「深くも春の

も (感)

も ひ

鑑。水(名)

〔一〕飲水を盛る器。椀の類。〔二〕飲料水。……(古)

も ひ しのつかさ

主水司(名) もんどのつかさ。

も ろ

諸(形)

〔一〕二つの。〇「諸矢」「二」多くの。〇「諸人」

も ろ は

諸又(名)

兩方に付きたる又。劍の類。

も ろ は た

諸肌(名)

兩方の肌。

も ろ は く

諸白(名)

白米を用ひて醸したる上等の酒。

も ろ は ぐ さ

諸葉草(名)

二葉の葵の一名。

も ろ ほ

諸穗(名)

多くの稻穂。(神樂歌)

も ろ ども

諸共(副)

共々に。●一所に。●引き連れて。

も ろ たり ど

諸折戸(名)

兩開きの折戸。

も ろ が た の ま ひ

諸縣の舞(名)

上古雅樂繁舞曲の名。(續紀)

も ろ が た ま ひ

諸縣舞(名)

諸縣の舞に同じ。

もろかつら

諸葛(名) 二葉の葵の一名。

もろかみ

諸神(名) 神々。●多くの神。

もろむく

諸向(自動四段) 悉く向く。○萬葉、武藏野の草葉もろむきかゝくも君がまに／＼我に

ふりにした。

もろむすび

諸結(名) 紐の結方の名。(圖)

もろうた

諸歌(名) 神樂にて諸擧の歌。

もろくち

諸口(名) 口々。多くの人の口。(空

穂)

もろや

諸矢(名) 二本の矢。……的に向ひて弓射る時は二矢たばさみてするを法とす。

もろこひ

諸戀(名) 兩人相互の戀。

もろこころ

諸心(名) 二人同じ心。(源氏)

もろこゑ

諸聲(名) 聲々。●多くの聲。

もろこし

唐土(名) (一)古へ我國にて支那を呼びたる名。(二)一種の黍。實は團子に製し莖に蒂

などに作るもの。●もろこしきび。●たうもろこし。●たうきび。

もろて

諸手(名) 左右兩手。

もろあけ

諸擧(名) 神樂にて本と末と雙方一同に聲を擧げて歌ふ事。

もろゆだけ

兩弓長(名) 弓の長さ七尺を二つ合はたる長さ。

もろみ

諸味(名) 酒、醬油などの醸したる儘にて未だ

続らざるもの。

もろし

脆(形、形狀言ク活) 固からざる有様。●弱き有様。●毀たれ易き有様。

もろしらが

諸白髮(名) 夫婦諸共に長壽して白髮になる事。

もろもろ

諸々(名) 多數。●悉皆。

もろもち

諸持(名) 兩手にて持つ事。(土佐)

もは

藻葉(名) 藻の葉。……食用にする時の名。●藻。

もばら

專(副) 一心に。●其事ばかりに。

もはん

模範(名) 手本。

もはや

最早(副) (一)はや既に。(二)今はもう。

もど

元本(名) (一)始め。●起り。●起原。●以前。

(二)根の方。(三)草木を數ふる詞。○「薄一もどし」(四)短歌の上の句。「五」禁中御神樂の時左右に列座する俗人の左の方の稱へ。又其左の方にて歌ふ曲。

故。舊(名) 古き事。●死したる人の存生中の事。

もど

元。素(副) 始め。●始めから。●前に。

もどろ

基(名) 土臺。●石する。●起原。

もどろかす

(他動四段) 亂す。●まだらに染むる。(雅)

もどろく

(自動四段) 亂る。●またらに染まる。(雅)

もどろく

文(他動下二段) 入れ墨する。

もどろり

髻(名) 髪のかつたる根元。

もどる

戻(名) 歸り。●歸り道。

もどる

悖(自動四段) 逆らふ。●違背する。

もどる

戻(自動四段) 元の通になる。●返る。

もどほる

回(自動四段) めぐる。●まはる。(古)

もどほし

(名) まさほしの轉。◎縫腋の袍の一名。

もどほす

回(他動四段) もまほらしむる。●めぐらす。

もどかし

(形。形狀言シク活) 氣のみ急きて成す事の

はかざらぬ有様。●まごころし。●はがゆし。

●ちれつたい。

もどがしは

本柏(名) 去年の葉のよくなる柏。

もどより

固(副) 始から。●元來。●本來。●もちろん。

ん。

もどつく

基(自動四段) 本として起る。●起因する。

もどな

(形) せんなし。●益なし。●徒に氣を採ます

る。○萬葉咲けりとも知らずしあらばもた

もあらん此山吹を見せつゝもどな」

求(他動下二段) 「一」尋める。「二」所望する。

「三」買ふ。

もどろた

本歌(名) 御神樂にて本(左方)の歌曲。

もどろちかひ

本誓(名) 衆生を救はんその彌陀の本

願。(佛教)

もどく

(他動四段) 非難する。●小言をいふ。

もどろろ

本黒(名) 矢の羽の一種。先は白くして下の

方黒きもの。

もどこめ

元込(名) 銃丸を筒先より込むるやうに造り

たる事。又は其銃。

もどて

元手(名) 資本金。

もどあら

本荒(名) 草木の本の方荒く生ひたる事。○

「もどあらの小萩」

もどま

(名) 其物に似て其物よりは劣るものに云ふ

詞。○「梅もどま」雁もどま」

もどま

(名) 非難。●小言。

もどゆひ

元結(名) 紙にて作りたる細き糸。髻を括る

に用ふるもの。

もどめこ

求子(名) 古代歌曲の名。東遊の中の一曲。

もぢろ

本白(名) 矢の羽の一種。先は黒くして下の  
方白きもの。

もぢげ

本滋(名) 催馬樂の曲名。

もぢめ

本締(名) 「一」敷あるものを一つに集めて統  
ぶる事。「二」勘定などの總括りをする役。  
も、こにも同じ。

もぢも

最。尤(副)  
戻(他動四段) 元の通にする。●返す。

もぢす

本末(名) 「一」本末。<sup>ほんばつ</sup>●始め終り。「二」短歌  
の本と末と。「三」御神樂の本と末と。

もぢすゑ

もち

餅(名) 食品の名。糯を蒸し白にて搗きたるもの。  
又は米などの粉を固めて唯蒸したるもの。

もち

糯(名) もちこめ。

もち

藕(名) 「一」もちの木。「二」もちの木の皮よ  
り作りたる粘り氣強きもの。鳥など差すに  
用ふ。

もち

持(名) 「一」受持。「二」所有。「三」勝負事に優劣  
の無き事。●あひこ。「四」維持。●保存の  
度。

もち

望(名) 「一」望月。●満月。「二」望月の日。●陰  
曆十五日。「三」月の中旬。

もち

屯(名) 綿の目方を數ふる詞。六兩。(和名抄)

もちゐ

用(名) もちひに同じ。

もちひ

用(名) 使ひ道。●所用。●入用。

もちひ

餅(名) もちの古言。

もちゐる

用(他動上一段) 用ふに同じ。

もちひかがみ

鏡(名) 鏡餅に同じ。

もちろん

勿論(副) 言はずさも。●無論。●論なく。

もちばな

餅花(名) 柳の枝に餅を丸めて花の如く幾つ  
も附けたるもの。之に種々の翫弄物など釣  
り下げ正月室内に飾りて祝ふ。

もちどりの

鶺鴒(名) 鶺鴒(枕詞。鳥藕  
に懸ける意。(萬葉)

もちり

人(名) 人を捕ふる時其衣をからませて自由な  
らしめざる爲めの具。長き柄の先に鐵の釘  
の如きものを幾  
つも集めたるや

もちりば

振羽(名) れられたる羽。●よちれたる羽。  
たり。●袖がらみ。(圖)

もちる

振(他動四段) れざる。●よちる。●よる。  
望顔(名) 物事の圓滿十分なる事。●満足。○

もちがほ

出家集「刈り残す水の眞菰にかくろひて影

もちがゆ

もちがほに鳴く蛙かなし

餅粥(名) 餅を入れたる粥。世俗一月十五日

食ひて祝ふ。

もちつき

望月(名) 陰曆十五夜の月。●満月。

もちつき

望月の(枕) たゞはし足れるめづらしなごの枕詞。(萬葉)

もちつきごま

望月の駒(名) 信濃の國佐久郡(今は北佐久郡)望月の牧にて飼養せし駒。古へは毎年朝廷に奉りしもの。……こまひき及びこまむかへを參考せよ。

もちむしろ

餅庭(名) 十二月に搗きたる餅を干す庭。

もちふ

用(他動上二段) 使ふ。●用立つる。

もちふ

捫(他動下二段)

もちる。●ねぢる。

もちのき

藕木(名) 木の名。皮より藕を製する木。

もちぐち

持口(名) わが受持てる方面。戦なごにいふ餅菓子(名)

もちぐし

餅菓子(名) 餅類の菓子。

もちあそび

持遊(名) もちあそびに同じ。(俗)

もちあへ

持前(名) 天性。

もちめ

持夫(名) 物を持ち運ぶ人足。●役夫。

糯米。餅米(名) 米の一種。餅に搗く米。粘り氣強きもの。

もちこす

持越(他動四段) 身に持ちたるまゝにて時間

もちあはす

又は場處を越す。

もちあそび

持合(他動下二段) 折よく持つて居る。

もちさな

持遊(名) 手に持ち遊ぶもの。●玩弄物。

もちりほ

望潮(名) 陰曆十五夜の満潮。○草根集「鳴の

海望潮ならぬ波の上に今宵満ちたる月の潮かなし」

もちすり

振摺(名) 信夫摺の一名。もちりたるやうに

摺り亂したるもの。

もり

森(名) 「一」大木の繁茂したる處。「二」(杜)神社

のある處。

もり

守(名) 「一」番する役。又は其人。「二」小兒を遊

ばする役。又は其人。

もり

銚(名) 鯨を捕ふる漁具。抛け付けて突き取る爲

めの鎗やうのもの。

もり

盛(名) 器に物を盛る事。又は其盛りたるもの。

もりべ

守部(名) 番の兵士。(萬葉)

もりたつ

守立(他動下二段) 守り育つる。

もりもの

盛物(名) 器に盛りて佛前に供ふるもの。饌

頭の類。

もりすな

盛砂(名) 武家時代儀式として門の兩端に山の如く盛り上ぐる砂。

もめく

蛻(自動下二段) 「一」虫類の外皮を脱ぎ去る。

「二」秀づる。●ぬきんづる。

もめけ

蛻(名) 虫類の脱ぎ捨てたる殻。●ぬけがら。

もる

漏泄(洩)(自動四段又下二段) 「一」外にこぼれでる。●脱する。●落つる。●抜ける。

もる

盛(他動四段) 「一」器に入る。●積み上ぐる。●「二」寸尺などの目記す。

もるめ

守目(名) 注意して見る人目。

もが

(後) もがなと同じ。○萬葉、我宿の尾花が上の白露を消たすて玉にぬくものにもがし。

もがり

(名) 尖りたる竹を矢來の如く筋違に交叉して作れる垣。

もがりぶね

藻刈舟(名) 藻を刈りに行く海士の乗る舟。

もがな

(後) 願の調。も有らばよい。○古今「かくしつ」さにかくにもながらへて君が千させに逢ふしもかなし。

もがく

(自動四段) 苦しみて身を動かす。●もたゆる。

もがさ

痘瘡(名) 痘瘡。

もがも

(後) もがなと同じ。○萬葉「川上のゆつ岩村に草むさす道にもがもな常少女にて」

もより

最寄(名) 其あたり。●近處。

もよほし

催(名) 「一」催し行ふ事。●設計。●興行。

もよほす

催(自動四段) きざして來る。

もよほす

催(他動四段) 「一」催促する。●企つる。●設計する。●興行する。

もやう

模様(名) 「一」有様。●様子。●「二」衣服などの形。●紋。

もよぎ

(名) 萌黃の轉。

もよぎにほひ

萌黃匂(名) 鎧の緘の名。萌黃の糸にてボカシにしたるもの。

もた

黙(名) たまつて居る事。●黙する事。●もたも

もたひい

鹽(名) 鹽の一種。酒を入るいもの。

もたいなし

(形。形狀言ク活) 勿體なし。(枕)

もたる

(自動下二段) 「一」よりかゝる。●すがる。●「二」食物の消化せずに残る。

もたる

(自動ラ變) 持て在る。○萬葉「月讀のもたるを

「水」

もたらす

齎(他動四段)

持參する。●携ふる。

もたぐ

撻(他動下二段)

持ち上ぐる。

もたまへり

(他動ヲ變)

持ち給へりの略。(源氏)

もたゆ

悶(他動下二段)

「一」心の憂ひ苦しむ。「二」體を動かして苦しむ。

もたす

默(自動四段)

物言はぬ。●だまって居る。●もくする。

もぞ

(後)

「一」末を危ぶむ詞。●かも知れぬ。○金葉「春雨にぬれて尋ねん山櫻雲の返しの風もぞ吹く」「二」たゞもぞぞの重なる詞。

もそろ

醺(名)

薄き酒。(和名抄)

もそろもそに

(副) 舟などの如く重き物を靜に引き寄する有様。●そろり／＼と。(出雲風土記)

もそと

(副)

今少し。●もすこし。(俗)

もさう

模造(名)

眞似て造る事。●うつし。△(動)―模造す。

もつ

持(自動四段)

たもつ。

もつ

持(他動四段)

「一」手に取る。「二」我物とする。●所持する。

もっぱら

專(副)

一心に。●其事ばかりに。

もつとも

尤(名)

道理。

もつとも

尤(最(副))

「一」中にすぐれて。●一番に。●最上に。「二」勿論。●いかに。

もつる

纏(自動下二段)

糸などの亂れて結ばるい。

もつたい

勿體(名)

重々しき見え。

もつたいなし

勿體無(形。形狀言ク活)

畏れ多し。●辱し。

もつさう

物相(名)

人に飯を配布する時之を量りて盛る器。

もつぐ

水雲(名)

海草の名。色青黒くして細かく滑らかなるもの。

もつこ

脊(名)

土石など入れて運ぶ具。繩を編みて作りたるもの。

もつかう

帽額(名)

もかうに同じ。

もつかうむすび

木瓜結(名)

紐の結び方の名。(圖)

もつて

以(副)

にて。●よりて。●を。

もつてのほか

以の外(副)

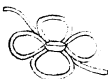
意外に。●分外に。●非常に。

もつし

沒收(名)

罪人の土地物品を官に取上ぐる事。

△(動)―沒收す。



もなか

最中(名) 「一」真中。「二」さいう。

もなぐ

(副) 惹無く。(雅)

もらひなき

賁泣(名) 人の泣くに誘はれて共に泣く事。

もらいび

賁火(名) 煙焼に逢ふ事。

もらふ

賁(他動四段) 他人より物を受くる。

もらす

漏。洩。洩(他動四段) 漏れしむる。

もむ

揉(他動四段) 力を入れ磨りて物を柔にする。

もむ

(自動下二段) 葛藤が起る。●こた／＼する。

もん

門(名) 「一」家の外郭の出入口。●かど。「二」其物に入る事を門に入るに比して云ふ。轉じては其物全體をも云ふ。○「師の門に入る」佛門に入る「三」物の一部分。○「文學の門」

「和歌の門」「四」大砲を射出する口。○「砲門を開く」

もん

紋(名) 「一」模様。●あや。「二」家の印として用

もん

ふる一種の模様。●定紋。●紋所。

もん

文(名) 「一」錢一つの稱へ。○「文久一文」「二」文章。●本文。●經文の文句。

もんゐん

門院(名) 女院を見よ。

もんばつ

門閥(名) 家柄。

もんばん

門番(名) 門を守る役。又は其人。

もんじん

文人(名) 大學寮の文章生。

もんぼふ

聞法(名) 説法又は經文など聞く事。佛敎

もんど

門徒(名) 「一」其宗旨の信者。「二」門徒宗。

もんど

主水(名) 主水司の畧。

もんだふ

問答(名) 問ひ答へ。△(動) 問答す。

もんどのつかさ

主水司(名) 官廳の名。宮内省に屬して禁中の井水、泉水などの事を掌るところ。

もんどころ

紋所(名) 家の定紋。

もんどしう

門徒宗(名) 眞宗の一名。

もんち

門地(名) 家柄。

もんちやく

悶着(名) もつれ。●故障。

もんぢう

問注(名) 訟訴。○沙石集「恐れ入りたる由御披露候へさて我々問注に負けて歸りしを」

もんぢう

問注所(名) 鎌倉幕府にて訴訟を聞く役所。

もんぢう

もんぢう

もんぢう

もんぢう

もんぢう

もんぢう

もんぢう

もんぢう

もんぢう

もんぢう

もんぢう

もんぢう

もんぢう

もんぢう

もんぢう

もんぢう

もんぢう

もんぢう

もんぢう

もんぢう

もんぢう

もんぢう

もんだい

問題(名) 「二」問の箇條。「二二」の疑問さな

りたる事柄。

もんだひ

問答(名) もんだふに同じ。

もんだん

文段(名) 文章の切れ目。

もんだふ<sup>ツツ</sup>

問答(他動四段) 問答さいふ名詞を活かし

たる詞。●問答する。(謡曲)

もんそ

文書(名) もんじよに同じ。(雅)

もんざうはかせ

文章博士(名) もんじやうはかせに同

じ。

もんざうのし<sup>シヨウ</sup>

文章生(名) もんじやうしやう

に同じ。

もんぞぶみ

文書書(名) もんぞに同じ。(空穂)

もんつき

紋付(名) 紋をつけたる衣服。

もんく

文句(名) 文章中の語句。●文章。

もんけん

門限(名) 門を締切る時間。

もんこ

門戸(名) 門の戸。●門。

もんごん

文言(名) 文章中の言語。●文句。

もんてい

門弟(名) 弟子。

もんざい

問罪(名) 罪を問ひ糺す事。

もんざい

文才(名) 文章の才。●文學の才。

もんきりがた

紋切形(名) 「二」紙にて切りたる紋の雛

もんめ

女(名) 形。「二」一定して少しも違はぬ事。

もんじ

文字(名) 「二」目方の名。貫を千分したるもの。

もんじ

文書(名) 筆にて書きたるもの。

もんじ

文章博士(名) 古代大學寮の教

もんじ<sup>シヨウ</sup>うはかせ

官。

もんじ<sup>シヨウ</sup>うはかせ

文章生(名) 大學寮の學生。

もんじん

門人(名) 門下。●弟子。

もんじ

文籍(名) 圖書。●書籍。

もんじ

問籍(名) なだいめんに同じ。

もんじ

門主(名) 門跡の住職。

もんじ

文珠(名) 菩薩の一つ。智慧を司るもの。常に

もんじ

獅子に乗りたる處を畫かく。(佛教)

もんま

字を知らぬ事。△(形)―文盲なる。

もんぜん

門前(名) 門先。

もんぜん

門跡(名) 「二」親王および攝家の猶子の住職

もんぜき

さなりたる寺の稱へ。「二」特には眞宗の兩

ま

本願寺。

ま

毛(名) 尺度および量目の厘の十分の一。

ま

一七三三

まほう 猛(名) 強き事。●烈しき事。●猛き事。△(形) 猛なる。(副)―猛に。

もふッ 思(他動四段) おもふの略音。○「わがもふ人」

もうろう 朦朧(副) 月影などのほのぐらき有様。(又) 朦朧で。

まほうぼる (他動四段) 貪り食ふ。●食欲を起す。○空穂「かくして臥し給へる程にまうぼるもの日に橘一つ柚三つ」

まほうご (代) 汝。●御身。●貴殿。

まほうとう 孟冬(名) 初冬。陰暦の十月。

まほうとう 毛頭(副) 毛の端程も。●少しも。●毫も。

まほうちぎみ (名) 前つ君の音便。「二」公卿。「二」大臣。

まほうりゃほう 魍魎(名) 山川草木などの精霊。●鬼神。●惡魔。

まほうか 孟夏(名) 初夏。陰暦の四月。

まほうだぬの 望陀布(名) 布の一種。昔し上總國望陀郡より調物に奉りしもの。

まほうざう 妄想(名) 妄に運らす想像。

まほうそうちく 孟宗竹(名) 竹の一種。幹太く葉細かく節は殊に美味なるもの。

まほうつ 詣(自動下二段) 神佛に参る。●参詣する。

まほうねん 妄念(名) 妄に起る念慮。(佛教)

まほうら 網羅(名) 網にて包みたるが如く悉皆統べ包む事。△(動)―網羅す。

まほうのぼる (自動四段) 参り上る。●参上する。(雅)

まほうく 設(他動下二段) 「二」準備する。●用意する。

まほうく (二)構ふる。●營む。●造る。

まほうく 羸(他動下二段) 利を得る。

まほうく (自動カ變) まわくの音便。○参り来る。(雅)

まほうく 盲官(名) 盲人の官位。檢校、勾當、座頭の類。

まほうけ 設(名) 設くる事。●用意。●支度。●準備。

まほうけ 豫備。

まほうけ 羸(名) 羸くる事。●利得。●得分。

まほうけのきみ 儲君(名) 皇太子。

まほうふ 毛布(名) 毛織物の布。ケツトの類。

まほうご 妄語(名) 佛教にていふ五戒の一つ。虚言。

まほうでく (自動カ變) 「二」参上する。「二」出で來の敬語。……(雅)

まほうあく 猛惡(名) 猛く惡しき事。△(形)―猛惡なる。

まほうさく 申。白(副) 申すの延音。○申して曰く。●申すに。●申すやう。

まうきのふぼく

盲龜浮木(句)

うきゝのいめを見よ。

まうしつぐ

申付(他動下二段)

「一」命令する。「二」徳

川時代の詞。嚴罰申し付くの略。○「若相背候者有之候は、急度可申付者也」

まうじん

盲人(名)

めくら。●めしひ。

まうじゃ

亡者(名)

「一」死したる人。「二」亡魂。●幽靈。

まうしづみ

申文(名)

上申書。●上奏文。

まうしご

申子(名)

神佛に祈りて得たる子。

まうしゆん

孟春(名)

初春。陰曆の正月。

まうしふ

妄執(名)

妄に残す執心。(佛教)

まうむく

盲目(名)

目くら。●目しひ。

まうせん

毛氈(名)

毛織の敷物。

まうす

申(助動四段)

敬語に添ふる詞。○「見せ申す」

「伴ひ申す」

まうす

申。白(他動四段)

貴人に對して言ふ。●言上する。

もの

物(名)

「一」宇宙間の萬物。また物體として考へらるゝ無形物。「二」食物。「三」神。●鬼。「四」事。「五」それと明言せざる場所を指す詞。●某處。○「ものへゆく」「ものより歸る」

もの

(後)

(雅二六)(老)人。

ものをに同じ。○萬葉「月讀の持てるなち水いさり見て君にまだしてをちえしむもの」

ものいひ

物言(名)

物言ふ事。●物の言ひ方。

ものいり

物入(名)

入資。●入用。

ものいみ

物忌(名)

「一」不淨に觸るゝを避けて家に籠り潔齋する事。「二」陰陽道にて云ふ惡日又は方位などを避けて家に籠り精進潔齋して慎み居る事。「三」物忌の時公用などにて止むを得ず外出する時人に知るゝやう烏帽子などに附くる物忌の目印。

ものばぢ

物恥(名)

恥かしがり。

ものほみ

物食(名)

鳥類の喉にある餌袋。

ものほし

物干(名)

濡れ物を乾す處。

ものごぼかし

物遠形。形狀言々活

「一」遠し。「二」感じの鈍き。●迂濶なる。

ものごぼなしに

(句)

物では無けれど。○古今「さむべき物ごぼなしにはかなくも散る花毎にたぐふ心か」

ものども

物共(名)

部下の人々。○「やなれものども」

ものを

(後)

ものなるに、然るに云々の意。●ものなるに何さて云々の意。○萬葉「時鳥來鳴きよもす卯の花の共にや來しと問はましものな」

ものおほえ

物覺(名)

記憶。●語記。

ものおもひ

物思(名)

物をくよくよ思ふ事。●苦勞。

ものわらひ

物笑(名)

人に笑はるゝ事。

ものわすれ

物忘(名)

失念。

ものか

(感)

驚きたる時にいふ詞。●ものかなに同じ。○大鏡「昨日事出だしたりし童へ捕ふべしさいふ事出で來にけるものかし」

ものか

(後)

「一」ものかはに同じ。○源氏「かゝる心はあるべきものかし」「二」疑の詞。●かに同じ。○新古今「月を猶待つらんものか村雨の晴れ行く雲の末の里人」

ものかは

(後)

意の裏返る詞。●物ならんや。○後撰「陸奥のなぶちの駒も野飼ふには荒れこそまされなつくものかは」

ものかは

(句)

物の數にもあらず。○後撰「我思ふ事のしげきに比ぶれば信太の森の千重はものかは」

ものがたり

物語(名)

「一」話。●談話。「二」昔の物語を書きたる書籍。「三」特に小説。

ものがたりぶみ

物語書(名)

物語を書きたる本。

ものがたりえ

物語繪(名)

物語の樣をかきたる畫。

ものがたる

物語(他動四段)

物語をする。●話す。

ものかな

(感)

かなに同じ。○不思議の事を承るものかな」

ものから

(後)

「一」物ながら。●けれども。○空穗「あやしく人は住むものから音せぬ處さと思ひしぞかし」新古今「暮れぬさと思ふものから藤の花さける宿には春ぞ久しき」「二」誤解してからの意に用ふ。

ものかき

物書(名)

字を書く人。

ものがしら

物頭(名)

武家にて一組兵卒の長。●隊長。

ものつつみ

物包(名)

遠慮。(雅)

ものなり

物成(名)

其田畑より産する穀類野菜。

ものならなくに

(句)

物にもあらぬに。●物でもないのに。○古今「糸による物ならなくに別路の心細くも思はゆるかな」

ものうんじ

(名)

物の腹立。(源氏)

ものうし

物憂(形。形狀言ク活)

「一」うしに同じ。「二」

いやきな。●心が進まぬ。●しぶくにする。  
（雅）

（名）ものうんじに同じ。（源氏）

ものうじ

（後）ものなれども。●ものなから。○伊勢、君  
來んさいひし夜毎に過ぎぬれば頼まぬもの  
戀ひついで寐る」

もののか

物部（名）古へ兵衛府に屬したる武士。

もののか

物樣（名）上古歌曲の一種。

もののか

物音（名）音樂の音。

もののか

物名（名）短歌の一種。或る物の名稱を文句  
の中に隠してよみ入る事。……古今集に

「ほささぎす」を隠して「來べきはささぎす  
ざぬれや待ちわびて鳴くなる聲の人をさよ  
むる」さよみたる類。

物具（名）「一調度。●手道具。「二甲冑。

物怪（名）人に取り附きて惱まする惡靈。●

崇り。●つきもの。

もののか

武夫（名）武勇ある人。●武士。

もののか

武夫の（枕）八十川川岩瀬なごにかゝる枕

もののか

詞。（萬葉）

もののか

物狂（名）狂氣。●狂人。

もののか

ものぐるほし

ものぐるほし

物狂（形。形狀言シク活）「一狂氣じみ  
たる。●氣違のやうである。「二氣のいらだ  
つ有様。●もどかし。○空穂「ものぐるほ  
しく遠かりけり」

ものぐる

物種（名）物の種。（雅）

ものぐる

（形。形狀言ク活）氣ぶしやうな。●なまけ  
がちな。

ものぐる

物真似（名）見聞く物事を真似る事。又ば之  
を業として公衆に見する人。

ものぐる

物學（名）學問。

ものぐる

尸者（名）上古の俗。死人のありたる家にて  
死人生前の衣を着け吊客に面會する人。

ものぐる

（紀）

ものぐる

（句）貴人に物を言ひ掛くる初に言ふ  
詞。物承るの意。●申し立ます。●いかに  
申候。

ものぐる

物氣無（形。形狀言ク活）物らしく無し。●

ものぐる

物の數で無し。●みすばらし。（雅）

ものぐる

物舊（自動上二段）何さなく古くなる。●も  
のさびしくなる。（雅）

ものぐる

物好（名）ものすきに同じ。

ものぐる

ものすき

ものぐる

ものすき

ものぐる

ものすき

ものぐる

ものすき

ものぐる

ものすき

ものぐる

ものすき

ものぐる

ものすき

ものぐる

ものすき

ものえんじ

(名) 物うらみ。(源氏)

ものあはせ

物合(名) 歌合、花合、女郎花合、瞿麥合、扇合、前裁合など此類の雅遊の總稱。

ものさわがし

物騒(形、形狀言シク活) 何さなく騒がし。●さわがし。●やかまし。

ものさし

物尺(名) 物の寸尺を計る具。金にて作りたるものを曲尺といひ。鯨又は竹にて造りたるを鯨尺といふ。

ものゆゑ

(副) 「一」ものなれど。●ものながら。●ものでは無いのに。○古今「秋ならで逢ふ事かたき女郎花天の川原に生ひぬものゆゑ」

ものめかし

(二)ものなれば。●ものであるから。○源氏「人数にも思されざらんものゆゑ我はいみじき物思をや添へん」(又)「ものゆゑに。(形、形狀言シク活) 物々し。●たいそうらなりなば」

ものめかす

(他動四段) 寵愛して一かごの間人問らしく仕立つる。○源氏「山賤の子迎へ取りてものめかしたつれ」

ものみ

物見(名) 「一」見物。●遊覽。「二」物を見るた

ものみだかし

めの建物。(三)戦争の時敵の動靜を伺ふ事。又は其人。●偵察。●斥候。物見高(形、形狀言ク活) 何事をも見たがる有様。

ものみぐるま

物見車(名) 見物のために乗り行く車。

ものし

物し(形、形狀言シク活) 「一」物々し。●高大らし。○空穗「物しからん才じも」(二)氣障りである。●きざな。○源氏「女君の深くものしと思し疎みにければ」

ものしり

物識(名) 物多く識りたる人。●博識。

ものび

物日(名) 儀式祭禮など一事件のある日。

ものも

(感) ものまうの略。

ものもらひ

物貰(名) 乞食。

ものまう

(感) 物申すの略。案内を乞ふ詞。

ものものし

物詰(名) 神佛への參詣。

物々し(形、形狀言シク活) 「一」立派な。●いかめし。●見だてのある。○空穗「髪たげにあまりてものくしう清げなる人の」(二)たいそうらし。●高大らし。●大げさな。……○謡曲「あら物々しや手並は知りぬ」

ものす

物す(他動サ變) すべて何事にも言はで分り

たる動詞の代りに用ふる詞。○源氏「親な

ご物し(居)給はぬ人なれば同「阿闍梨に

ものし(言ひ)つけ侍りにき同「思ふべき人

々の打ち捨てゝ物し(去り)給ひにけるなご

りし

ものずき

物好(名) 珍らしき物事をすく事。●好事。

もく

木(名) 「一」木。●木材。「二」木目。

もく

木工(名) 木工寮の略。

もぐ

(他動四段) 毀ちて引き取る。○「柿をもぐ」

もぐ

(他動下二段) こはれて取る。○「木の葉もけ散

る」

もくろむ

(他動四段) 企つる。●計畫する。

もくろく

目録(名) 「一」物の見出しに記す題目。「二」

進物の金品を記したる書面。「三」轉じては

進物の金子。

もくば

木馬(名) 木製の馬。昔は乗馬の稽古に用ひ今

は運動器械に用ふ。

もくごう

默禱(名) 聲を立てずにする祈禱。〔基督教〕

もくごく

默讀(名) 聲を立てずして讀書する事。△

(動)―默讀す。

もぐり

(名) 水中に入りて貝など取る人。

もくれう

木工寮(名) 官廳の名。宮内省に屬して禁

中工匠の事を掌るところ。官吏は頭、助、允、

屬あり。●こだくみのつかさ。

もぐる

(自動四段) 水又は土の中に潜り入る。

もくつか

目下(名) 目前。●只今。●現今。

もくよく

沐浴(名) 髪を洗ひ湯に入る事。●入湯。△

もくだい

(動)―沐浴す。

もくれい

目代(名) 國司の代理として地方の政務を執

るもの。

もくれん

目禮(名) 目にて會釋の意を表する事。△

もくれん

(動)―目禮す。

もくれんじ

木蓮(名) 木の名。春の末蓮に似て勾ひ高き

もくさう

紫の花咲くもの。

もくざう

木鑾子(名) 木患子に同じ。

もくざう

静に教の道を考へて默座する事。

もくざう

(基督教)

もくざう

木造(名) 木にて造る事。●木製。

もくづ

木像(名) 木製の肖像。

もくづ

藻屑(名) 水中に浮ぶ海藻の屑。

もくづび

藻屑火(名) 藻屑を集めて焚く火。(千載)

もくらん

木蘭(名) 「一」染色の名。黄赤にして黒みを

帯びたるもの。「二」織色の名。堅絲黒く横  
絲黄なるもの。

もくづけい

木契(名) 木製の割符。

もくげんじ

木患子(名) 「一」木の名。葉は旃檀に似て

黄色の花咲き黒く丸き實を結ぶもの。「二」  
其實數珠などに用ふるもの。

もくげき

目撃(名) 目にて見る事。△(動)目撃す。

もくふよう

木芙蓉(名) 灌木の名。葉は朝顔に似て大

きく花は木槿に似て更に美しきもの。

もくこん

目今(名) 目下。●只今。●現今。

もくかう

木瓜(名) 帽額に同じ。

もくてき

目的(名) 目當。●目途。

もぐさ

艾(名) 灸點の材料。莖の葉を乾して製したる

もぐぞい

木材(名) 器物などに作る材料の木。

もぐさん

目算(名) 目分量にてする豫算。●心算。●

もぐさく

自動) 茂り榮ゆる。○萬葉「水傳ふ磯の浦わ

もぐぎ

の岩つゝもぐさく道を又見なん」

もくぎ

木魚(名) 僧家の具。木にて丸く魚の頭の形に

もぐぎかう

造り中を空虚にして讀經する時打ち鳴らす  
もの。

もくさん

木魚講(名) 木魚を腹に下げて叩きつゝ  
題目を唱へあるく一種の佛教信徒の組合。

もくきん

木琴(名) 樂器の名。小さき板を箱の上に幾

もくゆ

個も渡して叩き鳴らすやうにしたるもの。

もくじ

木目(名) 木にあらはれたるあや。

もくじろく

默示(名) 自然に啓示する事。(基督教)  
默示録(名) 新約全書最後の書名。(基督

教)

もくじき

木食(名) 飯の代りに果實のみを食する事。

もくせい

木犀(名) 木の名。秋の頃白又は樺色の小さ

き花咲き香氣頗る高きもの。

もくせい

木星(名) 太陽系中最大なる遊星。地球を十

一倍半したる大きさのもの。

もくせん

目前(名) 目の前。●まのあたり。

もくす

默(自動サ變) だまる。無口で居る。

もや

霧(名) 霧。

もや

母屋(名) 寢殿の中央にありて主人の住む室。其

周圍にあるを庇と稱へ家來などの詰め居る  
處とす。……寢殿造を見よ。

もち

喪屋(名)

死者の葬儀を行ふまで棺を祭り置く

家。

もちひ

催合(名)

共有。●共同。

もちふ

催合(他動四段)

催合にする。

もちふ

紡(他動四段)

むやふに同じ。

もちし

萌(名)

人造の手段にて五穀などの芽を出しさをたつもの。

もちや

(副)

「一」雲霧などのかゝりたる有様。●鬱々。●「二」蒸し暑き有様。●むし〜と。……

(又)―もや〜と。

もやす

燃(他動四段)

燃はます。

もやす

萌(他動四段)

芽を出さしむる。

もけ

木瓜(名)

木の名。||ほけに同じ。(雅)

もけい

模型(名)

雛形。

もぶる

(他動四段)

粉の類を掻き交する。

もぶしつかぶな

藻伏束鮪(名)

藻に隠れたる二三寸の鮪。(萬葉)

もち

模糊(名)

もやく。●ぼんやり。(又)―模糊と。

もちろ

(副)

如く。○萬葉「沖に住む雄鴨のもちろや

さちこり息つく妹を置きてきぬかも」

もちろな

(名)

我如き男。●同等同齡の男。(萬葉)

もちろも

裳衣(名)

裳の如く腰の邊だけに纏ふ衣。賤民の着るもの。(榮花)

もちよふ

(自動四段)

遣ひまはる。●はらははふ。(雅)

もちぞ

(後)

「一」末を推し量りて危ぶむ詞。●かも知れぬ。○古今「花見れば心さへにぞ移りける色には出でじ人もこそ知れ」「二」たゞも

さこそその重なりたる詞。○拾遺「春かけて聞かんさこそ思ひしか山時鳥おそく鳴くらん」

もかう

帽額(名)

「一」簾の上の方に横に張る幕の如きもの。黒き簾の紋を染め出だしたる萌黄の絹を用ふ。「二」帽額に附くる紋の名。簾の紋の一名。(圖)

もかうのすだれ

帽額簾(名)

簾の紋を染めたる布にて縁取りたる

簾。(圖)

もえき

萌木(名)

若芽若葉の出でたる木。○夫木「夏のはじめつた家の萌木を見て」



もえぎ

萌黄(名) 青き黄との合ひたる色。●もよぎ。

●終。

もて

(副)

「一」持ちて。「二」以て。「三」意味なしに置く詞。○「もてわづらふ」「もてそこなふ」「見もてゆく」

もてはやす

(他動四段) 囃し立つる。●褒め立つる。

●賞美する。

もてつく

持付(他動下二段) 取り立てゝ仕込む。●取りつくるふ。●たしなみつゝしむ。●持ち込む。(雅)

もてなやみぐさ

(名) いひぐさ。●評判の種。(源氏)

もてなし

(名) 「一」扱ひ。●たしなみ。○源氏「世のためしにもなりぬべき御もてなしなり」空穂「そこなばれたれささまもてなしなまめきてめでたし」「二」響應。

もてなす

(他動四段) 「一」扱ふ。●他人の上にては。●たしなむ。●自身の上にては。○源氏「お前去らずもてなさせ給ひしほどに」同

もてあそぶ

弄。玩。戯(他動四段) 「一」持ちて遊ぶ。●

もてあそび

もちゃそびにする。「二」慰みにする。●遊に事する。○「和歌をもてあそぶ」「三」賞翫する。●愛する。○「月をもてあそぶ」

もてあつかふ

弄。戯。玩(名) もてあそぶ事。又は其物。●玩弄物。●おもちゃ

もてあます

(他動四段) 所置するに困る。●もてあます。●我力に餘りて所置し兼ねる。

もぎ

裳着(名) 女子の初めて裳を着る祝。……十三四才の頃行ひたるもの。

もぎ

模擬(名) 眞似する事。△(動) 模擬す。

もぎき

(名) 枯れて枝の無き木。(雅)

もゆ

燃(自動下二段) 火が煽を發する。

もゆ

萌(自動下二段) 若芽が出る。●若葉が出る。

もゆるみつ

燃水(名) 石油の異名。

もめん

木綿(名) 織物の一種。木綿糸にて織りたるもの。

もめんいど

木綿糸(名) 草綿より取りたる糸。

もめんわた

木綿綿(名) 草綿より取りたる綿。

もみ

樅(名) 木の名。葉は樅に似て松笠の如き實のな

るもの。

もみ

粃(名)

稻の殻。●まだ殻を去らぬ稻。

もみ

紅(名)

絹布の一種。深紅に染めたるもの。

もみぢ

紅葉(名)

「一」すべて草木の葉の秋になりて赤く色づく事。又は其色づきたる葉および木。

「二」木の名。楓。「三」紅葉もみぢ。され。

もみぢば

紅葉葉(名)

「一」紅葉したる葉。「二」楓の葉。紅葉葉の(枕) 散る過ぐうつるの枕詞。(萬葉)

もみぢはの

紅葉葉の(枕)

もみぢがり

紅葉狩(名)

「一」紅葉の季節にする鷹狩。

「二」紅葉見の遊山。

もみぢがさね

紅葉重(名)

重の色目。表紅、裏青。又は表紅、裏濃紅。

もみぢつき

紅葉月(名)

陰曆九月の異名。

もみぢのはし

紅葉橋(名)

七夕に牽牛の渡る橋の名。

……支旨抄に曰く「紅葉の橋は鵲の羽を並べて七夕を渡し侍る是をより羽の橋さといへり。曉の別を悲しむ涙に此羽紅に染みたるを烏鵲紅葉の橋さといへり」

もみぢのが

紅葉賀(名)

紅葉の季節の賀宴。(源氏)

もみぢころも

紅葉衣(名)

紅葉もみぢに同じ。

もみぢみ

紅葉見(名)

紅葉を見物して賞翫する事。

もみづ

紅葉(自動上二段)

草木の葉の秋になりて色づく。

もみぢほし

採鳥帽子(名)

陣中にて兜下に着る鳥帽子の名。柔かに揉みて作れるもの。梨子打、引立、柳さび折鳥帽子の三種あり。

もし

若。如(副)

萬一。●ひようとしたら。●ごうするさ。

もし

文字(名)

「一」字。「二」文句。「三」言葉。

もしほ

藻鹽(名)

海水を焼きて製する食鹽。……初學集に曰く「藻を刈り集めてそれに潮を汲みかけて日に干したるを簀の上に積み置きて又更に潮を汲みかけて垂るゝ故に藻鹽と云へり。藻は鹽木の代りに焼くものと思ひ誤る勿れ」

もしほ、ぐさ

藻鹽草(名)

「一」藻鹽を製する材料の海草。「二」藻鹽草は掻き集めて用ふる故書き集むるの意に通はせて雑記、閑書、隨筆などいふ意味にも用ふ。

もしほ、き

藻鹽木(名)

藻鹽を焼く材料の薪。

もしほ、び

藻鹽火(名)

藻鹽を焼く時の火。

もしは

若は(接) もしはに同じ。(源氏)

もしくは

若くは(接) 又は。或は。

もじごさり

文字鎖(名) 連歌。

もひ

もいの處にあり。

もも

股(名)

足の膝より上、腰に接する處。

もも

桃(名)

木の名。花は薄紅なるを普通とし白きも

赤きもあり。實は梅に似て面に毛あり先の尖りたるもの。食用となる。

もも

百(數)

ひやく。

ももいろ

桃色(名)

桃の花の如き色。薄紅。

ももち

百千(數)

百や千や。多數。

ももち

(數)

百。◎ちは一ツ二ツなどのつに同じ。

ももちどり

百千鳥(名)

「一」もろくの鳥。多くの

小鳥。○古今「百千鳥さへづる春は物毎にあらたまれども我ぞふりゆく」

「二」鶯の異名。○拾遺愚草「百千鳥木傳ふ竹の夜の程も共に蹈み見し節ぞうれしき」

「三」河千鳥の異名。○和泉式部集「水のはざりに千鳥の只一つ立てるを見て」

「友を無み川瀬にのみぞ立ち居ける百千鳥とは誰かいひけん」

「百日(名)」

「一」百晝夜。「二」百日目。「三」小兒

ももか

百日(名)

「一」百晝夜。「二」百日目。「三」小兒

ももかは

桃皮(名)

生れてより百日目に當たる祝。〔四〕人死してより百日目の祭靈。

ももよ

百夜(名)

百の夜。

ももよごさ

百世草(名)

萬葉集に出でたる草の名。其物は詳ならず。

ももよせ

股寄(名)

佩きたる太刀の股に接する處。

ももたち

股立(名)

袴の名所。左右兩側の明きを縫ひ止めたるところ。

ももたらす

百不足(枕)

い(五十の意にて)いそ(同上)やそ(八十の意にて)などの枕詞。百に足らぬ五十、八十の意。○萬葉「百足らずいかだ(筏)に作り」同「百足らず八十の衢に」

ももつたふ

百傳(自動)(枕)

こいかしこさ多くの處々を経傳ひ行くの意にて枕詞の如くに用ふ。○萬葉「もつたふ八十の鳥廻を漕ぐ舟に」同「もつたふ三野の國の記」此蟹や何くの蟹。もつたふつねがの蟹」

ももつたふ

百綴(名)

幾つも綴ぎ集めたる衣。

ももつたふ

百矢(名)

大なる簀に差して供に持たする諸種

ももつたふ

百綴(名)

幾つも綴ぎ集めたる衣。

ももつたふ

百綴(名)

幾つも綴ぎ集めたる衣。

ももつたふ

百綴(名)

幾つも綴ぎ集めたる衣。

ももつたふ

百綴(名)

幾つも綴ぎ集めたる衣。

ももつたふ

百綴(名)

幾つも綴ぎ集めたる衣。

ももつたふ

百綴(名)

幾つも綴ぎ集めたる衣。

ももつたふ

百綴(名)

幾つも綴ぎ集めたる衣。

ももつたふ

百綴(名)

幾つも綴ぎ集めたる衣。

ももつたふ

百綴(名)

幾つも綴ぎ集めたる衣。

ももつたふ

百綴(名)

幾つも綴ぎ集めたる衣。

百筋の矢。○太平記「百矢の中より唯二筋ぬいて」

ももふね

百船(枕) 度會(伊勢の地名)の枕詞。多くの船の渡るの意。(倭姫命世記)

ももぢり

百轉(名) 小鳥の幾聲もなく續けて轉づる事。○堀川「つれづれ何につけてかなぐさまん百さへづりの鳥なかりせば」

ももしの

桃尻(名) 馬なごに乗りて尻の据わらぬ事。(徒然)

ももしき

百篠(枕) みめの枕詞。○萬葉「もゝしぬの三野の王」

ももしき

百敷(名) 枕詞より起りての禁中。●内裡。○大和「別るれごあひもしまぬ百敷を見ざらん事の何か悲しき」

ももしきの

百敷(枕) 大宮の枕詞。

ももひき

股引(名) 股の膚に接して纏ふ袋やうのものの服。今のズボン下の類。

もす

百舌鳥。鴈(名) 鳥の名。鴈に似て小さくよく囀るもの。

もすそ

裳(名) 「一」裳の裾。「二」裳。「三」衣の裾。

もすのはちに

鴈の早贄(名) 春夏の頃鴈が種々の小

もすのはちに

鳥又は蛙などを捕へ來て木の枝又は莖などに貫き置く事あり。之を云ふ。●鴈の草ぐき。○散木「垣根には鴈のはやにへ立て、けり四手の田長に隠れかれつ」

鴈の草莖(名) 「一」鴈の早贄を見よ。

「二」草ぐりの意にて鴈が野の草葉を分けつくろつして飛び遊ぶ事。……轉じては物の陰に隠れて見えぬ事。○夫木「かりにゆふしをりも雪に埋もれて尋ねぞわぶる鴈の草莖」

